

旅
への
一冊

飯田 守二文 ミヤジシンゴ 撮影
Text by Mamoru Iida Photo by Shingo Miyaji



『日本辺境論』

内田樹著、新潮新書、777円(税込)

東芝 取締役代表執行役社長

佐々木則夫

地球儀で眺める世界

年末年始、タイムズスクエアで

行われる恒例の新年カウントダウンイベントに、オフィシャルスポンサーとして立ち会ったため、佐々木はニューヨークを訪れていた。

「大晦日には、除夜の鐘で百八つの煩悩の意味を感じる日本人とは異なり、アメリカ人はとにかく大

勢集まり、大騒ぎして楽しめます。

今年アメリカ東部時間の年越しとは別に、日本が新年を迎える現地時間の午前10時にも、タイムズスクエアに日本人が集まって、日本の新年を祝いました。

海外で二回、年越しを迎えたとはいえず、その行動力の原

点はボートにのめり込んだ学生時代にありのかもしれない。

「レースではローアウトといって、すべてのエネルギーを使い果たしてゴールで気絶するのが最高とされてきました。また、力だけでなく、キックする瞬間に全員の力をどう合わせるか、舵を切らずにいかにかにバランスを取りながらまっすぐ進むかなど、相応の技術も必要です」

米国の原発大手、ウェスチングハウス社の買収で中心的な役割を果たすなど、原子力事業を東芝の主力事業に押し上げた人物と評されている佐々木は、若い頃から「エネルギー」とエネルギーシチュエーションに関わっていたようだ。

「仲間から、『また漕ごう』と誘われることもありすが、体力的にはきつすぎますね。時間があれば、マウンテンバイクやロードレースなどの自転車を楽しんでいます。ただ、転倒して二回骨折したこともあり、今では会社からも止めら

株式会社 東芝
半導体、LED電球から、パソコン、家電、社会インフラ機器までの開発・製造からサービスまで、多岐にわたる事業を行う総合電機メーカー。地球環境に優しいエコ・リーディングカンパニーを目指している。
<http://www.toshiba.co.jp>



1949年、東京都生まれ。72年、早稲田大学理工学部機械工学科を卒業し、東京芝浦電気(現・東芝)に入社。以来、原子力発電機器、システムの設計・開発を担当。2003年、原子力事業部長、06年、執行役常務兼電力システム社長などを経て、09年より現職。「新入社員には、先入観や決め付けを持たない真っ白なキャンパスのような精神でほしい。何でも吸収でき意識の高い人ほど成長しやすいのです」と語る。

Norio Sasaki

れています(笑)」
そんな佐々木が、今回のニューヨーク旅行の供として持参した書物が「日本辺境論」である。思想家の内田樹が語る日本人論で、新しい年を世界の「中心」であるニューヨークで迎えるのに相応しい一冊と考えたのだろうか。

商品を生み出すには、機能性などに加えて、商品に対するイメージ「ブランディング」が重要です。この本は、タイトルに惹かれて手に取ってしまったほど、タイトルから伝わってくる本のイメージが読者のニーズにマッチしているのだと思います」

「世界を中心」を必要とする辺境の民、それが日本人なのだ、と説いている。こうした内容については、どう考えるのだろうか。

「例えば、ある事業にライバル社が投資すると聞きつけてくると、「当社も同額投資しましょう、それでないと遅れてしまいます」と訴えてくる社員がいる。あるいは期待できるマーケットが形成されると、日本の企業は各社が遅れま

いと競って参入していく。これらは順応性の高さともいえますが、逆に「私(当社)はこうなんだ」というオリジナリティの希薄さともいえます。若い人は考え方が違うという意見もありますが、以前、若者の間で「KY」という言葉が流行りました。空気が読めないということは、自分独自の考えよりも集団的な思考に安心感を覚えるということ、で、独創的な行動を望まない風潮は、世代を超えて存在しているといえるでしょう。この本にはある意味で、日本人の思考方法や結論の出し方が、面白い着眼点で描かれていると思います」

欧米で使われている世界地図では大西洋が中央にあり、日本は東の端にポツンと描かれている。辺境に暮らす日本人は、グローバルバリエーションが一段と進むビジネスの世界で、今後、どのように対応していけばいいのだろうか。

「平たい地図ではなく、丸い地球儀で世界を見ればいいのです」
辺境にとらわれない、大きな視野を佐々木は持っている。

(敬称略) A